W-4-2 鹿児島方言と甑島方言の呼びかけイントネーション[1]

Vocative intonation in Kagoshima and Koshikijima Japanese

窪薗晴夫（国立国語研究所）
kubozono@ninjal.ac.jp

１．　はじめに

本発表では、鹿児島県の薩摩半島で話されている方言（以下「鹿児島方言」）と、薩摩半島の西 30km の東シナ海に浮かぶ甑島列島で話されている「甑島方言」の呼びかけイントネーションを分析する。甑島方言は、母語話者が約 2,000～2,500 名（推定）であるが、若い世代への継承がほとんどなされていないため消滅危機方言の一つとなっている。話者数が少ない一方で、地域差が著しいことでも知られる（Kubozono 2012b, 2016, forthcoming）。

鹿児島方言と甑島方言はともに九州西南部に特徴的な２型アクセント体系（A 型、B 型）を有する一方で、語のアクセント型（ア型）を決定する音韻単位が音節であるかモーラであるかという違いを示す。つまり、鹿児島方言は syllable-counting language, 甑島方言は mora-counting language である。たとえば B 型は両方言において語末（正確には文節末）が高く発音されるが、鹿児島方言では語末**音節**が、甑島方言では語末**モーラ**が高くなる。A 型も、鹿児島方言では次語末**音節**(penultimate syllable)が、一方、甑島方言では次語末**モーラ**(penultimate mora)が高くなる。以下、［ はピッチの上昇位置を、］は下降位置を表す。（後述するように、甑島方言は地域差が著しいため、ここでは手打集落のアクセントを記す（窪薗 2012a））。

(1)　鹿児島方言と甑島方言の語アクセント

ア型	鹿児島方言	甑島方言	グロス
A 型	[ア]メ	[ア]メ	飴
	ナ[ツ]オ	ナ[ツ]オ	夏男
	[バ]レー	バ[レ]ー	バレー
	[ジ]カン	ジ[カ]ン	時間
	アカ[シン]ゴー	[アカ]シン[ゴ]ー	赤信号
B 型	ア[メ	ア[メ	雨
	ハル[オ	[ハ]ル[オ	春男
	ミ[カン	[ミ]カ[ン	蜜柑
	アオシン[ゴー	[アオシン]ゴ[ー	青信号

２．　調査の概要

鹿児島方言の呼びかけイントネーションについては先行研究があるが（kubozono 2017）、甑島方言については皆無であった。そこで本研究では、鹿児島方言については Kubozono (2017) を検証するために鹿児島方言話者４名について追加調査を行い、甑島方言については甑島方言話者 8 名について 2018 年に新規の調査を行った。話者の情報は次のとおりである（甑島方言は集落の位置により北から南に掲載）。

[1] 本研究は国立国語研究所共同研究プロジェクト「対照言語学的観点から見た日本語の音声と文法」および日本学術振興会科研費 KAKENHI 26244022, 16H06319 and 17K18502 の研究成果を報告したものである。

(2)　話者情報

方言	出身地・集落	生年（調査時年齢）	性別
鹿児島方言	旧姶良郡（加治木町）	1936(82 歳)	男
	旧川内市（御陵下町）	1942(76 歳)	男
	旧川内市（高江町）	1956(62 歳)	男
	旧川内市（向田町）	1956(62 歳)	男
甑島方言	里（上甑島）	1929 (89 歳)	男
		1956 (62 歳)	男
		1958 (60 歳)	男
	桑之浦（上甑島）	1952 (65 歳)	男
	中甑（上甑島）	1940 (78 歳)	男
	平良（中甑島）	1941 (76 歳)	男
	手打（下甑島）	1956 (61 歳)	男
		1961 (56 歳)	男

以下、両方言の呼びかけイントネーションの実態について報告する。文の種類を区別するために、次の記号（。！　？）を用いる。

(3)　a. 平叙文（文末形）ハルコ。
　　b. 呼びかけ文　　ハルコ！
　　c. 疑問文　　ハルコ？

３．　甑島方言の呼びかけイントネーション

３．１　基本形

甑島方言のアクセント体系は、鹿児島方言と同じように語に１つだけ高音調を持つ体系（平良集落）と、２つの高音調（重起伏）を示す体系（平良以外の集落）に二分できる（上村 1941, Kubozono 2016, forthcoming）。後者を手打集落の体系で代表させると、両者は次のようになる。重起伏は２つ目の山だけみると、単起伏のアクセント型と基本的に同じである。

(4)　甑島方言のアクセント体系

ア型	平良集落	手打集落	グロス
A 型	ナ[ツ]オ。	ナ[ツ]オ。	夏男
	ナツヤ[ス]ミ。	[ナツ]ヤ[ス]ミ。	夏休み
B 型	ハル[オ。	[ハ]ル[オ。	春男
	ハルヤス[ミ。	[ハルヤ]ス[ミ。	春休み

甑島方言の呼びかけ形は、(4)に示したいずれの体系（単起伏／重起伏）でも、A 型と B 型の２つの型が A 型に統一される。つまりアクセント型の中和が起こる。平叙文に比べてピッチレンジが大きくなり、また強く発音されるという違いはあるものの、ピッチ上昇・下降の位置については A 型の平叙文と同じパターンを示す。たとえば平良集落（単起伏）では次のようになる。

(5)　　平良集落の呼びかけイントネーション

ア型	平叙文	呼びかけ	グロス
A 型	ナ[ツ]オ。	ナ[ツ]オ！	夏男
	オバ[サ]ン。	オバ[サ]ン！	おばさん
B 型	ハル[オ。	ハ[ル]オ！	春男
	アン[サン。	アン[サ]ン！	兄さん

重起伏の体系（手打集落）においても同様のアクセント中和が起こり、A 型語彙と B 型語彙の区別がなくなる。

(6)　　手打集落の呼びかけイントネーション

ア型	平叙文	呼びかけ	グロス
A 型	ナ[ツ]オ。	ナ[ツ]オ！	夏男
	[オ]バ[サ]ン。	[オ]バ[サ]ン！	おばさん
B 型	[ハ]ル[オ。	ハ[ル]オ！	春男
	[アニ]サ[ン。	[ア]ニ[サ]ン！	兄さん

以上述べた現象は(2)に示した甑島 5 集落の全ての話者に共通する特徴であることから、この方言の呼びかけイントネーションは「（語末付近の）ピッチ下降」および「アクセント中和」という形で実現すると言うことができる。

３．２　バリエーション

(5)と(6)に示したイントネーション型を基本形とすれば、甑島方言の呼びかけイントネーションは(i)母音の長音化と(ii)高音調の移動(High tone shift)という 2 種類のバリエーションを示す。このうち(i)の母音の長音化はどの集落においても観察される現象で、特に相手が遠くにいる時に用いられる。ただし、生起の程度（すべての語に起こるか、短い語だけか）には地域差が見られるようである。また、ピッチの下降位置にも集落差が見られ、(7)-(8)のように長音の後でピッチ下降が起こる集落（平良、手打、桑之浦）がある一方で、[ナ]ーツ（夏）、ノ[リ]ーコ（典子）、[ナ]リ[ア]ーキ（斉昭）のように、長音の途中で下降が起こる集落（里、中甑）もある。

(7)　　平良集落の呼びかけイントネーション（長母音化）

ア型	呼びかけ（基本形）	呼びかけ（遠くへ）	グロス
	[ナ]ツ！	[ナー]ツ！	夏、奈津
	ナ[ツ]オ！	ナ[ツー]オ！	夏男
	オバ[サ]ン！	オバ[サー]ン！	おばさん
B 型	[ハ]ル！	[ハー]ル！	春
	ハ[ル]オ！	ハ[ルー]オ！	春男
	アン[サ]ン！	アン[サー]ン！	兄さん

(8)　　手打集落の呼びかけイントネーション（長母音化）

ア型	呼びかけ（基本形）	呼びかけ（遠くへ）	グロス
A 型	[ナ]ツ！	[ナー]ツ！	夏、奈津
	ナ[ツ]オ！	ナ[ツ]オ！	夏男
	[オ]バ[サ]ン！	[オ]バ[サー]ン！	おばさん
B 型	[ハ]ル！	[ハー]ル！	春
	ハ[ル]オ！	ハ[ルー]オ！	春男
	[ア]ニ[サ]ン！	[ア]ニ[サー]ン！	兄さん

もう一つ基本形のバリエーションとして観察されるのが、(9)の高音調の左方移動(H tone shift)である。この現象は母音の長音化より集落差が顕著で、起こる集落（里、中甑、桑之浦）と許容しない集落（平良、手打）がある。また前者の集落でも、語の長さや音節構造によって許容度に差が見られるようである。

(9)　　里集落の呼びかけイントネーション（高音調の移動）

ア型	平叙文	呼びかけ（基本形）	呼びかけ（変異形）	グロス
A 型	ナ[ツ]オ。	ナ[ツ]オ！	[ナ]ツオ！	夏男
	ナ[オ]ミ。	ナ[オ]ミ！	[ナ]オミ！	直美
B 型	[ハ]ル[オ。	ハ[ル]オ！	[ハ]ルオ！	春男
	[マ]サ[オ。	マ[サ]オ！	[マ]サオ！	正男

３．３　疑問文との異同

これまで平叙文との違いを中心に呼びかけ文のプロソディーを見てきたが、もう一つ問題になるのが疑問文との違いである。鹿児島方言と同じように、伝統的な甑島方言（老年層）では疑問文が文末の疑問詞（文末詞）を伴って起こるため、(10)のように呼びかけ文との違いは明確である。鹿児島方言と同じように疑問文は文末のピッチ下降で具現され、この下降が文末詞で起こる。

(10)　　里集落老年層話者のイントネーション（呼びかけ文 vs. 疑問文）

ア型	平叙文	呼びかけ文	疑問文	グロス
A 型	ナ[ツ]オ。	ナ[ツ]ーオ！～[ナ]ツオ！ （～ナ[ツ]オ！）	ナ[ツ]オ [ケ]ー？	夏男
	ナ[オ]ミ。	ナ[オ]ーミ！～[ナ]オミ！ （～ナ[オ]ミ！）	ナ[オ]ミ [ケ]ー？	直美
B 型	[ハ]ル[オ。	ハ[ル]ーオ！～[ハ]ルオ！ （ハ[ル]オ！）	[ハ]ルオ [ケ]ー？	春男
	[マ]サ[オ。	マ[サ]ーオ！～[マ]サオ！ （マ[サ]オ！）	[マ]サオ [ケ]ー？	正男

これに対し、鹿児島方言と同じように 70 歳代以下の話者では文末詞なしの発音も許容される。その場合、B 型の語は平叙文のアクセント型をベースに、疑問の下降を語末モーラに付与する形で疑問形が産出されるため、呼びかけ文との違いは明確となる。一方、A 型の語彙はもともと語末で下降が生じており、ピッチの変動位置だけで両者を区別することは困難となる。ただし、[ナー]ツ！と[ナ]ツー？のように母音の長音化を利用すると両者の区別が可能になることもあるようである。

(11)　手打集落中年層話者のイントネーション（呼びかけ文 vs. 疑問文）

ア型	平叙文	呼びかけ文	疑問文	グロス
A 型	[ナ]ツ。	[ナ]ツ！～[ナー]ツ！	[ナ]ツ？～ [ナ]ツー？	夏、奈津
	ナ[ツ]オ。	ナ[ツ]オ！～ナ[ツー]オ！	ナ[ツ]オ？	夏男
	ナ[オ]ミ。	ナ[オ]ミ！～ナ[オー]ミ！	ナ[オ]ミ？	直美
B 型	ハ[ル。	[ハ]ル！～[ハー]ル！	ハ[ル]ー？	春
	[ハ]ル[オ。	ハ[ル]オ！～ハ[ルー]オ！	[ハ]ル[オ]ー？	春男
	[マ]サ[オ。	マ[サ]オ！～マ[サー]オ！	[マ]サ[オ]ー？	正男
	[セン]セ[イ。	[センセ]イ！～[センセー]イ！	[セン]セ[イ]ー？	先生

４．　鹿児島方言の呼びかけイントネーション

鹿児島方言に関しては Kubozono (2018)の報告とほぼ同じ結果が得られた。

(12)　a. 呼びかけイントネーションは A 型だけでなく B 型もピッチ下降を伴う。

b. A 型、B 型いずれの語も 2 つのパターン（Ⅰ型、Ⅱ型）を許容する。

Ⅰ型：語末の 2 音節間でピッチ下降

Ⅱ型:語末音節内でピッチ下降(語末が軽音節の場合には2モーラの長さに伸びる)

（＝語末の 2 モーラ間でピッチ下降）

c. A 型の語はⅠ型を、B 型の語はⅡ型を好む傾向があるが、A 型も B 型も同じ場面で両方のイントネーション型が可能である。その場合、アクセントの中和が起こる。

A 型：[バー]チャン。　　バー[チャ]ン！

B 型：オバー[チャン]。　オバー[チャ]ン！

d. Ⅰ型に比べⅡ型の方が相手への親近感が高い。よって「ちゃん」のような親近さを表す接辞が付く語はⅡ型を好む傾向がある。

e. A 型語のⅠ型と B 型語のⅡ型は、それぞれ疑問文のイントネーション型と酷似する。

Ⅰ型とⅡ型の具体的な例は次のとおりである（語頭の?＝容認度が落ちる)。

(13)　鹿児島方言の呼びかけイントネーション

ア型	平叙文	Ⅰ型呼びかけ	Ⅱ型呼びかけ
A 型	[バア]チャン。	[バア]チャン！	バア[チャ]ン！
B 型	オバー[チャン。	?オ[バー]チャン！	オバア[チャ]ン！
A 型	ナ[ツ]オ。（夏男）	ナ[ツ]オ！	ナツ[オ]ー！
B 型	ハル[オ。（春男）	ハ[ル]オ！	ハル[オ]ー！
A 型	[リョー]コ。（良子）	[リョー]コ！	?リョー[コ]ー！
B 型	ヨー[コ。（陽子）	[ヨー]コ！	ヨー[コ]ー！
A 型	リョー[コ]チャン。	リョー[コ]チャン！	リョーコ[チャ]ン！
B 型	ヨーコ[チャン。	?ヨー[コ]チャン！	ヨーコ[チャ]ン！
A 型	キョートー[セン]セー。（教頭先生）	キョートー[セン]セー！	?キョートーセン[セ]―！
B 型	コーチョーセン[セー。（校長先生）	?コーチョー[セン]セー！	コーチョーセン[セ]―！

５．　まとめ

甑島方言と鹿児島方言はともに、呼びかけ文を語末のピッチ下降で実現する。これは宮崎県の小林方言（1 型アクセント体系）の老年層話者と共通する特徴であり、これが九州南部に共通する呼びかけイントネーションの特徴であることがわかる。

甑島方言と鹿児島方言はともに２型アクセント体系であるが、前者の呼びかけイントネーションは基本的に A 型アクセントかそれに類似するパターンに統合（中和）され、B 型の独自性は失われる。これに対し鹿児島方言では呼びかけイントネーションに２つの型（A 型アクセントに似た I 型と B 型アクセントに語末下降を加えたⅡ型）が存在する。すなわち甑島方言に見られるようなイントネーション型の統一は見られない。にもかかわらず、A 型の語と B 型の語が同じイントネーション型（ I 型もしくはⅡ型）を示し、両者の区別が失われることがあるため、この方言でもアクセントの中和は起こる。

疑問文との関係では、甑島方言も鹿児島方言も疑問文を呼びかけ文と同じように文末下降で具現する（木部 2010, 窪薗 2011）。老年層（特に男性）の場合は、疑問の終助詞（「か、け、や」など）が疑問文に不可欠であり、この終助詞の有無によって形態的に疑問と呼びかけが明瞭に区別されるが、70 歳以下の高年層・中年層においては疑問の終助詞が任意であり、終助詞なしでも疑問文を作ることを許容する。このため、疑問文と呼びかけ文のプロソディーが酷似する環境が現れる。甑島方言の場合、A 型語の疑問と呼びかけの基本形がピッチの変動位置についてはほぼ同じであり（ナ[ツ]オ？、ナ[ツ]オ！）、ピッチだけで区別することは困難なことが多い。このため、母音の長音化によって両者を区別する傾向も観察される（ナ[ツ]オー？、ナ[ツー]オ！～ナ[ツ]ーオ！）。

鹿児島方言においても疑問文と呼びかけ文の区別が微妙になる環境が存在する。A 型語は I 型呼びかけイントネーションをとる場合（ナ[ツ]オ？、ナ[ツ]オ！）、B 型語はⅡ型呼びかけイントネーションをとる場合（ハル[オ]ー？、ハル[オ]ー！）に疑問と呼びかけがほぼ同じパターンで現れる。両者のパターンが全く同一であるかどうか、今後の研究課題の一つである。

参考文献　(selected)

平山輝男 (1951) 『九州方言音調の研究』学界の指針社。

井之上英雄 (2005) 『鹿児島方言とアクセントの辞典』毎日新聞名古屋開発株式会社。

上村孝二（1941）「甑島方言のアクセント」『音声学協会会報』65-66 号 12-15.

木部暢子 (2010) 「イントネーションの地域差—疑問文のイントネーション」小林隆・篠崎晃一（編）『方言の発見』1-20, ひつじ書房。

窪薗晴夫 (2006) 『アクセントの法則』（岩波科学ライブラリー）、岩波書店。

窪薗晴夫 (2011)「アクセントとイントネーション—日本語の多様性」『人間文化』 vol. 13, 11-16. 人間文化研究機構。

Kubozono, Haruo. (2012a) Word-level vs. Sentence-level Prosody in Koshikijima Japanese. *The Linguistic Review* 29, 109-130.

窪薗晴夫 (2012b)「鹿児島県甑島方言のアクセント」『音声研究』16(1). 93–104.

Kubozono, Haruo (2016) Diversity of pitch accent systems in Koshikijima Japanese.『言語研究』150. 1–31.

Kubozono, Haruo. (2018) Post-lexical tonal neutralizations in Kagoshima Japanese. In H. Kubozono and M. Giriko (eds.) *Tonal Change and Neutralization.* 27-57. Berlin : Mouton de Gruyter.

Kubozono, Haruo (forthcoming) Secondary high tones in Koshikijima Japanese. To appear in *The Linguistic Review*.